

# サプライズ辞任の可能性

本当は投げ出したい気分だろう。飽きてもきた。だが「辞める」と言われたら絶対辞めない。最終章のシナリオは意外性に富んでいなければならないからだ。

都議会に屈服した男がキレた。「利権とは何だ。利権とは！」  
6月7日の定例会議最終日。各会派から雨後のようにぶつづれた都政運営への注文や批判を、難境でジッと聞いていた石原慎太郎都知事が突如、登壇者に向かってこう怒りはじめたのだ。  
「どうやら、知事の統治能力欠如を指摘した女性議員の言葉、利権争いがカチンときたらしい」  
「側近政治や内部人事や利権の争いなどが垣間見られる恐怖政治を引きおこし、中略、統治能力の欠如は辞職の勧告に値する」  
「利権」はこんな文脈の一部で、目くじらを立てるほどでもないのだが、聞き流せないところが、石原知事の窮乏を物語っている。直後の議員お別れ会に出席した知事の姿には、苦しい思いが言葉の端々ににじんでいた。  
「この年になって、人生で初めての勉強させていた」とは思わなかった」  
この3カ月あまり、都政は、深刻な混乱に陥っていた。

「都議会を屈服させようとした浜浦氏の目論見が、驕るの発端。知事も一枚かんでいるに違いないが、都議選前にもう一度でも戦争を差し出してきたのだから、これ以上戦う必要もない」  
この解説通り、石原知事にまで襲いかかればかりだった議会の攻勢は急速にしばし、取まってきたところ、それはあくまで、石原家臣団と都議会互党との間での

話を。職員に目を向けると、組織を離断されたりもきれなきが充満している。  
なぜなら、浜浦氏の専横を許した管理責任を、石原知事は当初わびながら、その後、実質的に前言を撤回したからだ。  
「まわりに、いい大人がいながら役に立たなかった」  
浜浦氏を名副知事と称賛する一方で、他の特別職や幹部こそが職務怠慢だったように岸外へ向けても釈明したたのである。  
その様子に、元副知事は、「責任転嫁、よくないですね」

「私を恨めしそに見上げてね」(2002年7月19日、知事定例会見)  
敗訴は、法務部の稚拙な法廷戦術によるものと言わんばかりに担当者の表情まで詳細に持ち出し、会見でなされたのだ。法務部長は都庁を去った。  
大貫氏はいう。  
「今回の一件も同じ。あれほど、浜浦ははずばらしい、浜浦の言うことはオレの言葉と思え、とやってみたら、その幹部も反論できない。明らかに強調する石原氏だが、責任の取り方については女々しいのはどうしたことかと思う。なぜ、不徳のいたすところと言えないのか。これでは、晩節を汚してしま

知事として無自覚

石原慎太郎のサプライズ辞任  
6つの可能性

**7.22浜渦心中辞任説** 7月22日  
浜渦副知事が辞職するのが、都議選後のこの日。「泣いて馬鹿を斬る」と言わしめた側近を辞職に追いこんだ議会の当でつづき、石原氏も辞任か。

**8.15靖国神社参拝辞任説** 8月15日  
知事就任2年目から突然始まった石原氏の靖国参拝。終戦記念日を避けて参拝する小泉首相及び、対中国との関係で自民党の一部や財界からも出る参拝見送り論の「弱腰」に抗議し、辞職か。

**天下取り・国政復帰説 I** 10月ごろ  
中西一善前衆院議員の辞職で、空白となった衆院東京4区。知事の地元選挙区で行われる衆院補選に立候補し、国政復帰を果たすか。

**天下取り・国政復帰説 II** 来年夏ごろ  
自民党総裁任期切れを前に、小泉首相が衆院解散。都知事を辞して、衆院選に立候補、天下取りのラストチャンスにかけるか。

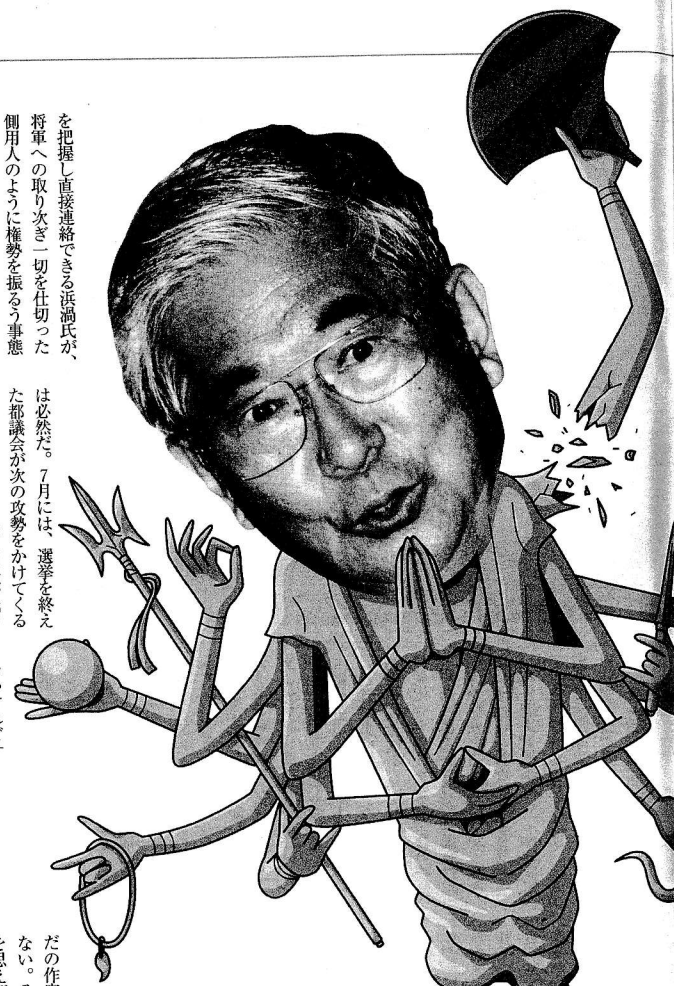
**三男衆院当選・花道説** 来年夏ごろ  
小泉首相が衆院解散。前回衆院選で東京3区に立候補しながら、落選した三男高氏の衆院当選を見とけて引退し、かねてよりの念願だった「恋愛小説」執筆に専念か。

**青島流不出馬表明説** 2007年3月  
都知事三期目の意欲を様々な形でにじませつつ、直前になって「やめたー」。一期4年間務めて突然投げ出した前任者・青島幸男氏と同じサプライズを最後に演出か。

**三男衆院当選・花道説** 来年夏ごろ  
小泉首相が衆院解散。前回衆院選で東京3区に立候補しながら、落選した三男高氏の衆院当選を見とけて引退し、かねてよりの念願だった「恋愛小説」執筆に専念か。

「知事不在」も問題視された。知事がやってくるのは、定例会見のある毎週金曜日、その他はらら登壇も教時間の滞在のため、行動ぶりを発揮して教育現場の国旗掲揚・国歌斉唱徹底を推進したその横山氏。「ポスト浜渦体制」では、筆頭副知事に抜擢されている。この人事などを見ると、石原氏の統括意欲は確かに衰えていないようにも見え、実のところはどうだろうか。  
「(2002年)3年のうちに、石原慎太郎という千手観音が最後の大変化を起こすのではないかと。知事で終わる人じゃないですよ」  
こう話すのは、知事の政策スタッフを務めた一橋総研の市川周氏だ。  
同氏によると、石原知事は、必要だと思ったら、役に立つ「人材」が勝手に飛んでくる。千手観音のような人物だ。この騒動の最中、市川氏と同じような期待からか、夕刊紙などにも、石原新党の動きも加進の見出しが躍った。だが、以前のような待望論が今も永田町に吹いているとは思えない。  
「石原知事はかつて、中曽根康弘元首相との対談「永遠なれ、日本」で、こう述べた。  
「政治家としてはともかく、作家としての私は胸を張って一流だといえます」  
「72歳となった石原知事は、この狭間で、「最後のサプライズ」の演出方法を探り始めているに違いない。

イラスト 岡山進矢



を把握し直接連絡できる浜渦氏が、將軍への取り次ぎ一切を仕切った側用人のように権勢を振るう事態を招いた。  
確かに、庁内の混乱は、浜渦氏の強い個性への反発という面も大きいのが、既取手すべてよしのお任せ環境で仕事をしてきた才人、石原慎太郎の無自覚が批判されるのはやむを得ないだろう。  
「都庁でできない仕事だって多い。バカなことを言わない方がいい。新人社員じゃあるまいし」  
3日の定例会議では、こう、記者の質問を一笑にふした知事も、浜渦氏が抜けた新体制では、登壇日を今より増やさざるを得ないの

photo 朝日新聞社

は必然だ。7月には、選挙を終えた都議会が次の攻勢をかけてくることも当然予想され、知事が職を投げ出す可能性さえ、一部ではさやかれていた。  
何となく、衆院議員だった95年、「今の日本は、さながら去勢された宦官のような国家になり果てている」と大演説をぶら、唐突に任期途中で職を辞した前歴の持ち主だった。本人の意欲や大義名分次第では、いつやめると言い出しかねない。  
「辞める意思なんて毛頭ないね。田中康夫みたいに一回辞めて選挙をやってもいいよ。そこまでやら

「折れたフライド」とも呼ばれた。それでも、石原氏は知事に留まった。それでも、石原氏は知事に留まった。それでも、石原氏は知事に留まった。

だの作家に戻ったら、相手にされない。それに、国政を絶えず三男を思えば、知事の威光は絶大。議会の攻勢ががまんできなくなった息子の選挙を思いついての深遠慮でしよう(元都幹部)  
三男高氏は元銀行員。初陣の前回衆院選で、東京3区から自民党公認で立候補し落選。次をうかがっている。そのホームページをみれば、知事の役どころは一目瞭然だ。推薦議員には自民党都議らが顔を並べ、対談相手には、横山洋吉都教育長も登場、威光をフルに活用しているのだ。

「折れたフライド」とも呼ばれた。それでも、石原氏は知事に留まった。それでも、石原氏は知事に留まった。それでも、石原氏は知事に留まった。

編集 藤生 明